

露西亞の藝術(二)

黒田清輝口述

○繪畫

一般の藝術に就ては既にざつと話して置たが、今日は少し繪畫の事を述べて見やう。サテ露西亞の繪畫として一番最初に私の記憶を惹き起すのは、マリ・バスキルツシエフ Marie Bakitschreff. の Meeting 云ふ圖だ。此圖は巴里のリユクサンブル美術館に掛けて有つて、私が畫の稽古を始める頃から始終目に慣れて居たのだ、巴里の所謂ガマン(餓鬼)共の風俗を寫したもので、建築場の板圍ひの前に、學校歸りのわんぱく小僧が五、六人寄り集まつて何か話をして居る處だが、眞に寫實でよく出来て居る。どうしても之れが一少婦の手に成つたものとは受取れぬ位の出来である。



マリ・バスキルツシエフ《ミーチング》

バスキルツシエフは、佛蘭西のバスチアン・ルバージュの弟子で大層バスチアンに可愛がられ、隨て畫風もバスチアン丸出^{マダ}してある。バスチアンの作に Pastel 云のがあるが、矢張古板塀の前に人を馬鹿にした様な面付の餓鬼が一人立つて居る圖だ。此の圖と前のミーチングとを比べて見ると、全く同じ筋の畫である。此のバスキルツシエフは

一千八百八十四年の十月三十一日に二十四歳を二期として巴里で死だ。此時はバスチアンも既に病牀に在つて、非常に此の美人の死を悲んだが、此大家も亦程なく同年の十二月十日に、僅か三十六で死だ。此の女が死んだ後に、其生前に書いて置いた日記が發賣され、其れがまた小説的で中々面白いので大に世人の同情を惹いた。私も讀で見たが、成程面白い本だ。

ミーチングが、私が露人の作の抑も見初めてである。今度日露の戦争が起つて、吾々同胞の萬歳の聲の裡に沈んで仕舞つた(昨年四月十三日)ペトロパウロスタに乗り込で居て、墓ない最後を遂げたウエレスチャギヌ Veretchagine と云ふ人の名が、恐らく本邦の多數の人が始めて聞た露國の畫家の名であらうと思ふ。ウエレスチャギヌは一千八百四十二年にノウゴロドで生れて、佛國の大家ジェローム(山本芳翠君の師)に就て學び、一千八百六十七年のチルケスタンの役にコフマン將軍に連れられて従軍し、又露土戦争の時にはニコラ太公の司令部附であつたから自然戦争に關する圖を多く作つた。然し亦印度西藏地方をも漫遊した事が有つて彼の地方の風俗なども澤山畫いた。

元來露西亞の繪畫は、他の藝術と同じく其起原が極新らしい。尤も第十世紀の頃に耶蘇教と共に宗教的の畫像のやうなものが這入つたが、之れが爲めに別に住民の美術心を惹き起すと云ふ事もなく、其儘年月が立つて仕舞つた。第十八世紀と爲つて多くの畫家が佛國或は伊國から入込んで、是で始めて繪畫が興つたやうなものだ。さうして一千七百五十七年には、美術學校も出來たが、然し只下らなく伊のギド・レニヤ、佛のルブランの類を真似るやうな事計りであつた。

さうかうして居る内に、可也上手な畫家が三人も出來た。其中でカル・ブリュロフ(Karl Bryulov)(一七五九—一七九九年死)と云のが有る。ボンペイの最終の日と云圖を書いて、夫れはく、非常な評判であつた。此圖は伊國で製作したのだつたが、其國の人達も大に感服して、ミケランジェロやラファエロ以來の大家として、往來で知らない人が敬禮するやら、又芝居見物に行けば群集がブリュロフ萬歳と囃し立ると云ふ騒ぎであつたから、此圖が本國に着て公衆に展覽させた時などの評判は想ひ遣られる。是が單に素人の側から計でなく、彼の有名な文章家のプーシキン、ゴッル、ウオター・スコットなどからもむやみに譽め立てられたさうだ。然し今に爲つて見ると此圖は決して夫れ程の物ぢや無いのだ、其れよりも寧ろアレキサンドル・イウアノフ(Alexander Ivanov)(一八〇五—一八六六年死)の宗教的歴史畫の方が餘程好い。又此頃にポール・フェドトフ(Paul Fedotov)(一八〇五—一八五二年死)と云人が有つて風俗畫が上手で有つた。

繪畫が他の藝術の主腦で有る丈に、時勢の影響を蒙ることも亦著るしい。即ち歴山帝二世の即位(一八五五年)が、忽ち一大進歩の基因を爲た。

ウアシリー・ペロフ(Vassily Perov)(一八三三—一八八二年生)イラリラン・プリヤニシニコフ(Illion, Prianschnikov)(一八三九—一八九九年生)ウアシリー・ウエレスチャギヌ(Vassily Verestchagin)レンスタンチン・サキツキー(Constantin Savitsky)(一八四五—一八八五年生)などが出て、専ら社會の状態を寫して現世の不平を訴ふる事に努めた。此千八百六十年頃の奮起時代も亦程なく過ぎ去つて繪畫は愈多方面多趣味なものとなり、益發展して來た。一千八百七十二年にはイウアン・クラムスコイ(Ivan Kramskoi)(一八〇七—一八八七年生)の發起で、十三人の腕利共が

揃つて、舊式の連中に反對の旗を擧げ、巡廻展覽會と云ふものを組織した。これには上手な畫家で賛同する者も多く、一つには美術心の普及にもなり、亦一つには藝術が全く型を脱けて自由なものと爲つた。

其處で二三の印象畫をやる者も出來、又コンスタンチン・マコフスキー、(Constantin Makovsky) (一千八百三十九年生)の Roussalka と云ふ圖などは露西亞の或る物語に據つて作られた。エリアス・レピン、(Elias Repin) (一千八百四十四年生)は當代の大家で、露人の性格を畫き現はす事に妙を得て居る。此人の作品中の有名なのは、コザック兵が陣中で戯れに土帝へ上つる奏文を書いて居る様子を畫いたもので、中々賑やかな、至て活氣の有る圖だ。又此人はトルストイの肖像を幾つもかいた。肖像畫は最も得意なのである。宗教畫と云ものは兎角革新の氣を受け難いもので或る一定の型を外れるとどうも難有味が薄くなるやうに感ぜらるゝものだが、此のむづかしい宗教畫さへも、今では寫實の感化する所と爲た。

風景畫も初めは矢張外國の勢力範圍内に、長い間まごまごして居た。外國で拵へるのも多かつたが、偶偶本國の風景を畫いても、何となく外國のやうにこね付けると云姿であつた。例へばモスコウの市街を寫しても、羅馬か何處かのやうに直して仕舞ふのだ。然るにイヴァン・シ、キン (Ivan Schischkin) (一千八百二十一年生)が全く此の風を逐ひのけて仕舞つて、始めて露國の自然が畫になつて出た。

先づ露西亞の繪畫の來歴を摘まんで、はしよつて話せば斯様なものである。要するに十八世紀から始まつて暫らく人眞似をして居り、十九世紀の半過、殊に七十年前後から、いよく我が物に爲つて來たのだ。さうして全體の畫風はあくまでも寫實である。

今日では露西亞風として確かに一派を成して居るが、歐州の他の所謂一等國なる英佛獨などに比すれば、未だ少しく落ちると云はねばならぬ。然し其盛んにやつて居ることは驚く程であるから、遠からず立派になるであらう。

千九百年の巴里の大博覽會の時には此の國からの油繪の出品が總計で二百八十三點で、此出品人が百二十九人、さうして大賞が一人、金牌が四人も有つた。日本の銀以上二人も無しなどは眞に情けない次第である。

『光風』一三 明治三八年九月